

■ 解答・解説

- 問1 (ア)「参り」＝謙讓語で、参上する先である中宮定子への敬意(作者→定子)。(イ)参上した(伺った)動作の主語は中納言(藤原隆家)です。「たまひ」は尊敬の補助動詞で、その中納言を高めています。
- 問2 「(中納言が中宮定子に)御扇を差し上げなさる」。「奉る」は「差し上げる」という謙讓の本動詞、「せたまふ」は二重尊敬(最高敬語)です。
- 問3 (1)「奉ら」＝謙讓。(2)扇を受け取る側である中宮定子への敬意で、敬意の主は地の文を書く作者(清少納言)。つまり作者→定子。(3)「せたまふ」＝尊敬の助動詞「す」＋尊敬の補助動詞「たまふ」で二重尊敬(最高敬語)。扇を差し上げる動作の主体である中納言を高めており、作者→中納言の敬意。※「奉る」は定子へ、「せたまふ」は中納言へと、向きが二つある点に注意。
- 問4 「隆家はすばらしい骨を手に入れております」。「こそ」の結びで文末が已然形「はべれ」になっています。この「はべり」は丁寧の補助動詞で「～ております・～ます」の意。「いみじき」は「すばらしい」。
- 問5 係り結び(係結び)。係助詞「こそ」があると、文末が已然形(ここでは「はべれ」)で結ばれます。
- 問6 「いみじ」＝はなはだしい・すばらしい(程度が並々でない)。「おぼろけなり」＝並一通りだ・ふつうだ。「かたはらいたし」＝(見聞きして)きまりが悪い・みっともない。
- 問7 「並一通りの紙ではとても張ることができないので」。「え～まじ」で「とても～できない」という不可能を表します。「おぼろけの」は「並一通りの・ふつうの」の意。
- 問8 「(中納言が中宮定子に)申し上げなさる」。「申す」は「言ふ」の謙讓語＝「申し上げる」、「たまふ」は尊敬の補助動詞＝「～なさる」です。
- 問9 (1)「申し」＝謙讓の本動詞「申す(＝申し上げる)」。申し上げる相手の中宮定子への敬意で、作者→定子。(2)「たまふ」＝尊敬の補助動詞。「申す」という動作をする中納言への敬意で、作者→中納言。これで「作者→定子(謙讓)」「作者→中納言(尊敬)」の二方向になります。
- 問10 (1)「きこえ」＝謙讓の補助動詞「きこゆ」。「問ふ」相手である中納言への敬意で、作者→中納言。(2)「させたまへ」＝尊敬の助動詞「さす」＋尊敬の補助動詞「たまふ」で二重尊敬。「問ふ」動作の主体である中宮定子への敬意で、作者→定子。「定子が中納言にお尋ね申し上げなさると」という、定子を高めつつ中納言にも敬意を払う二方向の敬語です。
- 問11 「まったく今まで見たこともない骨の様子だ」。「さらに」は下に打消の語(ここでは「見ぬ」の「ぬ」)を伴って「まったく(～ない)」と全部否定を表す呼応(こおう)の副詞です。
- 問12 結びの語は「申す」。係助詞「なむ」を受けて、文末(連体形)の「申す」で結ばれています。
- 問13 「ざり」＝打消の助動詞「ず」で打消(～ない)。「つ」＝完了(強意)の助動詞。あわせて「(これほどの骨は)見えなかった」という意味になります。
- 問14 「声高く(大きな声で)おっしゃるので」。「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語＝「おっしゃる」です。

問15 (1) もとの形は「なるなり」。(2) 「な」のもとには断定の助動詞「なり」で、活用形は連体形「なる」。(3) 下の「なり」は伝聞・推定の助動詞。(4) 「なるなり」の「る」が撥音便で「なんなり」となり、その撥音「ん」が表記されずに「ななり」となりました。

---

問16 「(それは扇の骨ではなく) くらげの(骨) であるようだ/であるそうだ」。伝聞・推定の「なり」なので「~のようだ・~だそうだ」と訳します。

---

問17 (例) 中納言が「誰も見たことのないほどすばらしい骨だ」と自慢したのを受け、骨のないくらげの骨だと返して、そんな骨はあり得ないとしゃれてみせた点。(四十字程度)

---

問18 くらげには骨がない。その「骨のないくらげ」をわざと持ち出して、「(見たこともない骨というなら、扇の骨ではなく) くらげの骨でしょう」と返すことで、中納言の大げさな骨自慢を、機知をきかせて軽くかわしたのです。

---

問19 訳:「これは(私=) 隆家が言ったことにしてしまおう。」

気持ち: 清少納言の当意即妙のしゃれにすっかり感心し、「うまいことを言うものだ、自分の手柄にしたいくらいだ」と感服している気持ち。だから怒らずに笑っているのです。

---

問20 (例) 「こういうことは、聞いていてきまりが悪いことの中に入れてしまうべきだけれど、『(自慢話でも) 一つも書き落とすな』と(みんなが)言うので、どうしようもない(仕方がない)。」

「べけれ」は当然・適当の助動詞「べし」、「いかがはせむ」は「どうしようか、いやどうしようもない」の反語的な言い方です。

---

問21 「な~そ」で「~してくれるな・~するな」という禁止(やわらかい禁止)を表します。「一つな落としそ」は「一つも書き落としてくれるな」の意。

---

問22 (ア) 清少納言 (イ) 随筆 (ウ) 平安時代(中期)。一条天皇の中宮定子に仕えた女房が書いた作品です。

---

問23 美的理念=をかし。この章段では、中納言の自慢を「くらげの骨」と切り返す清少納言の知的で明るい機知のおもしろさに、「をかし」の美がよく表れています。

---

問24 (ア) 源氏物語 (イ) 紫式部 (ウ) あはれ(もののあはれ)。『枕草子』の「をかし」(知的なおもしろさ)と、『源氏物語』の「あはれ」(しみじみとした情趣)は、よく対比されます。

---